

関口雄揮記念美術館 所蔵作品展
雪景紀行

2011年2月26日(土)～6月19日(日)

休館日／月曜日(祝日の場合は翌火曜日)

開館時間／午前10時～午後4時30分
(入館は午後4時まで)

入場料金

大人	800円	(600円)
大学・専門学生	600円	(400円)
中高生	400円	(200円)
小学生	200円	(100円)
幼児	無料	

*括弧内はリピーター料金です。リピーター料金は、過去の入場券の半券のご提示でご利用いただけます。

関口雄揮 記念美術館

関口の作品世界を特徴づける白と黒のイメージ。それは北海道の冬の風景から感得された、自然の厳しさによって研ぎ澄まされた美の象徴的な表現に他ならない。1972年の3月、初めて北海道を訪れた関口は、それまで体験したことのない凍てつくような寒さと、すべてを覆い尽くすかのように降り積もる雪の圧倒的な存在感と美しさに感化され、それらを絵画化する着想を得た。以後30年以上にわたる、追求の旅の始まりである。

それ以前の関口が、雪を描くことに関心を持っていなかったかというとそうではない。埼玉県出身の関口にとって、雪を目にする機会はさほど珍しくはなかったはずであるし、現に初期の作品のなかにも雪を描いたものが数例認められる。しかしながらそれらの作品のなかの雪は、色彩的な効果によって風景を引き立てる役割が期待されて描かれている場合がほとんどである。すなわち雪は、あくまでも風景の添加物であったと言えよう。

それに対して北海道での経験後の関口は、雪の存在感と主体性を追求する方向へと態度を変えてゆく。言い換えば、雪なしには成立しないような風景、風景が雪を引き立てるような風景の追求を始めるのである。こうした態度によって、凍てついた静寂の森や、風雪の吹き荒れる漁村など、関口の代表的な作品が描かれてゆくこととなる。

こうした変節を踏まえ、本展では、1950年代から晩年に至るまでの雪を描いた作品を展示し、年代ごとに雪の表現がどのように変化していったのか、辿ってみたい。

第二展示室

春の風景を描いた作品を紹介する。関口は訪れて間もない早春の風景を好み、新緑や澄んだ水、冷たさを残す空気の様子を、爽やかな青色や緑色を駆使して描いた。秋の風景とは対局の、関口のもうひとつの色彩の世界がそこにある。



《早春の道》2005年

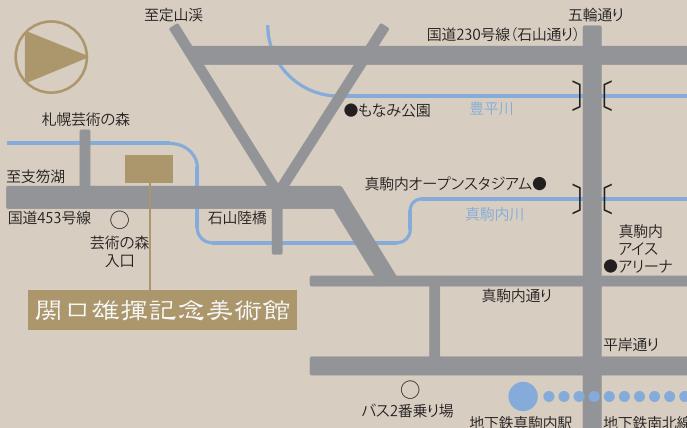
第三展示室

関口の持ち味である写実性の高い風景描写は、緻密な自然観察がその根底にある。本展では風景を構成する個々の植物のスケッチを展示し、関口の観察力の高さと、制作を支える画家の地道な営みを評価、紹介したい。



《セイタカアワダチソウのスケッチ》1980年

周辺地図



交通

■地下鉄・バスをご利用のお客様

地下鉄南北線「真駒内」駅バス2番乗り場より中央バス乗車
「芸術の森入口」下車（所要時間14分 約15分間隔で運行）
真駒内方面に徒歩1分

■お車をご利用のお客様

札幌市街中心部より国道453号線を南下
支笏湖方面に約40分

関口雄揮記念美術館

〒005-0853 札幌市南区常盤3条1丁目（芸術の森入口）
TEL 011-593-5050 URL <http://www.sekiguchi-muse.jp/>